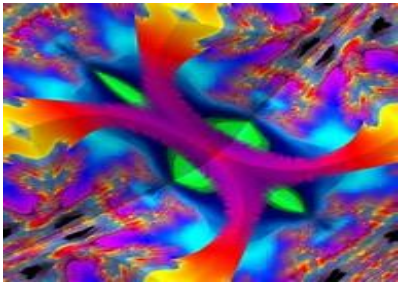
空に返す

有森信二



激しい陽射しの中を、痩せた銀色の背中をわずかにくねらせ、川は音もなく流れていた。あたりには稲田が広がり、稲田の尽きる果てには、水平線がかすかに波立っている。

川は、黍畑や芋畑の連なる低い山あいを抜け、村境の稲田に出て、小さな温泉町のある半島の根元に溺れ込んでいるのだった。

この時期—梅雨末期の大雨や台風の襲来で、川は度々氾濫し、村の半分ほどが水浸しになるのであったが、今年は違っていた。水が出るどころか、梅雨明け以来二か月近くも雨らしい雨が降らない。最初のうち、余り過ぎるほどの陽射しの中で、黒々と葉を太らせていた稲田は、今は至るところにヒビ割れを作り、葉末は茶色の縮れを見せ始めている。

「こんなくそ暑いときにい、葬式でもあるまいによ」

巳代治は、川の底からバケツをたぐり上げながら、今朝出掛けに父が吐き捨てて行った言葉を反芻している。今時分父たちは、半島の突端に近い母の妹の嫁ぎ先に行っている筈である。六年間寝たきりだったその家の老婆が、昨日朝早くに息を引き取ったのだという。

普段、付き合いもろくにねえちゅうに、知らせてよこさなきゃええんだ。聞けば放っとく訳にもいかんだろうが。父は沢庵を手でひと掴みし、音をたてて噛みくだきながら、ナフタリンの強い匂いのするシュミーズを着て手鏡を覗き込んでいる母の背中に言った。そうして、窮屈そうに結んだネクタイの結び目のあたりから汗を吹き出させ、母は開くとバリバ

リ音のする日傘を箪笥の奥から引っ張り出して、畦道を歩き、赤い鳥居のある稲荷山を越えたところのバス停から、二つだけバス停の近道をして出掛けたのだった。

火が点けば、瞬く間に焼け野原になるぞと、村人の誰もが田圃を見る度に言い、忌ま忌ましそうに空を見上げる。空はどこまでも青く高く澄みわたっていて、その中心に白く引き締まった灼熱の太陽がある。

村人たちの多くは、田圃の方はとうにあきらめ、日銭の入る普請工事に出たり、隣県の街の港湾人夫として稼ぎに出ていた。しかし、作付けの手際のよさや、穫入れの早さで誰にもひけをとったことのない父は、稲荷山の松男や川下の晋策たちと、夜明け前から日暮まで一日も欠かさず、川からバケツの水を自分の田圃に引き上げている。

全く、目端のさといやつらばかりよ、とぶつぶつ言いながら、流れの少ない川に、荒縄に吊したバケツを放り込み、水が八合目ぐらいになるのを待って荒縄をたぐり上げる。たぐり上げた水は、一滴も零さないように自分の足元に傾ける。しかし、バケツ一杯の水など、裂けたヒビ割れの深くにあっという間に呑み込まれてしまい、次のバケツを傾ける頃には、今注いだ水の跡さえわからないほどに乾ききってしまうのだった。

そんないたちごっこを、気が遠くなるほど繰り返す。荒縄をたぐり上げる指の皮はめくれ、肉が切れ、傷口からは血膿がにじみ出す。傷口に巻いた絆創膏は水に濡れて捩れ、用をなさない。指の肉に食い込む荒縄は、鋼みたいに硬く鋭い。

巳代治は野球帽をあみだに被り、半ズボンを泥まみれにして、バケツを力いっぱいにたぐり上げる。父が使うものよりは小ぶりの底の浅いバケツであるが、六年生の巳代治には手に余る。ちょっとでも気を抜こうものなら、バケツもろとも川の中に、頭から転げ落ちてしまいそうになる。

腰抜け野郎！　いったい、いくつになる？　俺がお前の歳の頃など、牛でも馬でも一人で使ったもんだ。仕事の手が止むと、すぐに父の大声が飛ぶ。父は、巳代治の倍ほどのバケツを片手でひょいと引っ張り上げ、麦藁帽の下からしんせいの煙をふっふっと吐く。その父が今日はいない。そのかわり、百杯の水を上げるように、と言い置いた。

お前のバケツで百杯じゃ何の足しにもなりゃせんが、ないよりゃあましじゃ。父は出掛けに念を押し、そのまま歩きかけたが、門口まで行って振り返り、いいか、きっちり百杯だぞ。そのかわり、百杯になったら学校に行ってもええぞ、と変に気前のいいことを言った。そして、首筋の汗をタオルでせわし気に拭き、日傘の母を十メートルも後に残し、大股でずんずん歩いて行った。

学校に行けば、信久や辰彦たちがグラウンドにいる。ソフトボールをしたり、自転車を乗り回したり、この頃はグライダーをこしらえ、飛行距離を競っている。信久も辰彦も、自分のグライダーを真新しい自転車で追い掛けて行く。

六十杯になった。シャツも帽子も半ズボンも、滴る汗にまみれている。日は高く、いつまでも中天を移る気配がない。巳代治は、ひりつく指の傷を舌先で舐めると、ペッと唾を吐いた。絆創膏を巻いた傷口は生臭くて酸っぱい味がし、吐いた唾には赤い粒が混じっている。口に後味の悪さが残ったので、二度、三度唾を吐いた。

振れて糸状になった絆創膏を傷口に押し広げると、巳代治は気合を入れ直し、バケツを川底に放った。そうやって、水がバケツを浸すのを待つ。バケツに水が満ちてくると、下腹に力を入れ、ウッという声とともに荒縄を引く。すると、自分の背丈ほどの川底から、バケツが鉄球となり、飛沫をとばしながらせり上がってくる。

水は浅瀬を伝ってきたため煮えていて、藻の切れっ端や木切れや草の葉が浮いている。砂や泥も流れ込んでおり、抱え上げると、饐えたどぶの匂いがする。しかし、足元の土に一気に傾けるとき、水の粒は生まれたばかりの稚魚の群れのように躍り、弾ける。

足元で土が鳴る。乾いてそそけだった割れ目が、喉を鳴らして稚魚を飲む。稚魚たちは、日の下に幾十という銀鱗をきらめかせ、巳代治の指の間を躍りあふれながら、割れ目の奥に零れ落ちて行く。

すると、稲穂の上に一陣の涼風が湧き起こる。そう感じるだけなのかもしれないが、縮れかけた葉末がかすかに息を付くのがわかる。巳代治は、狙いを定めてまたバケツを川底に放る。そして、うまい具合に流れに落ちたバケツに、荒縄を通して力を伝える。

後三十九回の作業をし終えたら、学校のグラウンドに行ける。信久たちとソフトボールをしたのは、三か月も前になる。始業式が早く済んだので、昼頃まで遊んで帰ったら、温床から顔を出した父に、このくそ忙しいときにい、とぶん殴られそうになった。

七十になる祖母は二年前から寝たきりだったし、母も血圧が不安定で、一人前の力仕事はとても出来ない。だから、巳代治は、学校が終わると真直ぐに家に帰り、すぐ田圃や畑に出なければならない。家に帰ると、稲荷下の麦畑にすぐに来ること、などと母の書き置きが待っている。そんなことを考えながら、目にしみ込んでくる額の汗を、まくり上げたシャツで拭こうとした。

ギャッ！　巳代治は、バケツも荒縄も放り捨て、一メートルばかり横っ飛びに跳ねた。冷やりとしたうごめくものが、足指を這ったのだった。蛇だ、と思った。

振り返ると、和市が立っている。目深に被った野球帽の下の目玉を見開き、驚いたのは自分の方だろう、という顔をしている。

呼んでも気付かないじゃないか、と和市は手いっぱいに抱え込んでいるものをバラバラ振りほどき、先端を川に垂らした。ゴムホースだった。延ばすと結構長く、二十メートルは

ゆうにある。

「学校のゴミ捨て場にあった。使えねえかな、ほら、中庭のタンクの、あれ」

五年生の理科の時間に、学校の中庭のタンクの水を、ゴムホースを使ってガラスの水槽に移したことがあった。巳代治は、電気も発動機も使わないのに、タンクの水がホースを通り、瞬く間に水槽を満たすのを手品でも見るように眺めたのだった。

巳代治は、川底に転がったままのバケツには目もくれず、和市の振りほどいたホースに飛び付いた。ホースはかなり古びており、指の先でつまむとそのまま内側にねばりつき、少し引っ張るとポロッともげてしまうほどであったが、うまく使えば、まだなんとか水は通せそうだった。先に巳代治が川に飛んだ。和市も続いて飛んだ。

巳代治は和市を上流に歩かせ、自分はホースの先端を口に銜えると、思いきり吸った。日向臭いゴムの臭いと、乾いた土埃が口の中いっぱいに広がったが、水は出なかった。唾を吐き、もっと強く吸った。しかし、焼けた空気がホースに通うばかりである。

巳代治は帽子を脱いで藪の上に放り投げると、両膝をふんばり、頬に火がつくほどの力を込め、ホースを吸った。やっぱり、水は出なかった。

貸してみろ。和市が、巳代治の手からホースを奪った。和市は、ホースの先を頭の高さまで持ち上げたり、川底まで下ろしたりしていたかと思うと、川底に鼻をくっつけるほどにかがみ込んで、ホースを吸い始めた。そして、長い間吸っては止め吸っては止めしていたが、おっ！　とうめき声を洩らすと、後ろにへたり込んでいる巳代治の顔を見上げた。丸く浅黒い顔の中で、和市の歯が白く光った。

和市の指の間から、銀色の羽を翻らせ、無数の黄金虫が次から次へ飛びたち始めた。

手こずらせやがったな。中庭のときのようには、うまくいかんかった。和市は、あふれてくる水の玉を両手ですくいながら、肩で何度も大きな息をした。あまり大きく息をした弾みで、傾きかけていた野球帽がずり落ちそうになった。その途端、笑っていた口元がゆがみ、ずり落ちそうになった帽子を、濡れた手であわてて掴んだ。

巳代治は一度だけ、和市の帽子のない頭を見たことがある。和市は五年生の春、長崎から転校して来たのであるが、クラスでの自己紹介のときも、授業中も帽子を脱がない。朝会で校長の話を聞くときも、弁当を食うときでさえ、白い帽子を被ったままである。服装には口やかましい担任も、和市を注意しようとしないし、朝会で前に並んだ教師たちも、誰一人咎めようとしない。どころか、教師たちの誰もが、和市の白い帽子から故意に目を逸らそうとしているふうにさえ感じられるのだった。

ピカドンでやられたっちゃ、とちょうど長崎のことを勉強

したばかりだったので、長崎から転校して来たというだけで、和市をピカドンに結び付けてしまった。
「恐ろしゅう熱かったちゅうが、天ぷらの油よりも熱かったやろか」
「皮がべらべらむけてしまったちゅうに、よお。でも、目も鼻もちゃんとくっついとる」
　みんなが口々に喋るのを、和市は口を引き結んだまま聞いていた。そうだとも、違うとも言わない。巳代治は、和市の仏頂面を冷や冷やする思いで眺めながら、自分も、ピカドンの熱でやられて、腹脹らませてひっくり返っとる馬の絵見たことあるぞお、と言ったりしたのだった。しかし考えてみれば、自分たちはピカドンから三年以上経って生まれたのであるから、和市にはもともと関係ないのだし、長崎は長崎でも和市の住んでいた町は、ヒガシソノギ郡とかいうずい分な田舎町だったらしい。
　ピカドンの次は、眉毛が離れているという話になった。眉毛が離れているというのは、フギの子だとかで、父親が遊び過ぎるせいだという。言われてみると、和市の父の重蔵は田圃や畑には出ず、一日中スクーターにまたがり、家々を回っている。そして、相手が婆さんや後家さんや嫁入り前の娘であろうと、上がり込んで話し掛け、砂糖や酢や醤油が売れるまで帰らない。重蔵は、巳代治の家にも月に一度ぐらいの割で来るのであるが、不機嫌そうな顔をしているのを見たことがない。赤ら顔に汗を浮かべ、誰にでも愛想よく声を掛けていく。
　和市の母という人は、後添えだとかで、まだ娘みたいに若く見えるくせに、人前には出て行けない肋膜とかを長い間患っているのだという。ところが、夜になるとヒステリーを起こして、泣きわめいたりするというのだったから、重蔵のやつめ、身から出た錆じゃ。しかしな、よくもまあ次々に女を泣かせるやつよ、と村人たちは言った。だが、品切れを見込んだようにやって来る重蔵の砂糖や醤油を、みんな結構心待ちにしている。
　眉毛の次は、背中まわりの火傷だ、という噂だった。こちらの方は、和市の親戚から聞いた話だとかでかなり確からしく、重蔵が商売に出掛けている隙に、伝い歩きを始めたばかりの和市が、囲炉裏の中に逆さまに転がり込んだという。
「罰が当たったんぞな。嘘も子供もありながら、よその娘に手え出したりするからろくなことはねえ。第一、何も知らずに生まれてきた子供のことを考えてみろや。だから、その子までがとんだ大火傷を負うたりする」
　信久や辰彦たちが、大人たちから聞いてきた話を声色をつかって吹聴すると、喝采の声があがる。そんなときも、和市は口を引き結んで俯いたまま、教科書をめくったり、けしゴムを転がしたりしている。

　運動会のプログラムは、あと二つだった。最後の地区対抗リレーを前に、五、六年生による騎馬戦が始まろうとしてい

た。巳代治と信久は赤組、辰彦と和市は白組だった。
ピストルが鳴ると、信久の乗る馬は大きく迂回して、白組の後ろに廻った。そして、白組のしんがりにいる辰彦の馬と戦闘を開始するために、早足で駆け寄った。真先に突撃して既に潰されてしまった巳代治たちは、間近で信久と辰彦の乗る赤と白の馬が、激しくぶつかり合う瞬間を信じて見上げていた。
しかし、戦闘を始める筈の二頭の馬は、並んだまま斜めに走り、グラウンドの中央に進んだ。赤組の信久がやにわに体を沈めて飛び付いたのは、白組の騎手である辰彦の帽子ではなく、組み手である和市の帽子だった。
一瞬のことだった。和市の白い帽子と、帽子を締め付けていた鉢巻が空に飛んだ。信久の差し上げた手。空の青さに放たれた白い帽子。飛んだ白い帽子を素早くとらえ、握りしめた辰彦の指…。会場が静まった。音という音が止んだ。中心には、和市が立ち尽くしていた。和市の頭を遮るものは何もなかった。黄土色の鈍い光が小さく揺れ、かすかに歪んだ和市の顔が、まるで笑っているようだった。

畦に上がれ、と和市が両手に水の音をジャブジャブさせながら言った。これだけの勢いがありゃ大丈夫。和市はずり落ちそうになった帽子をしっかり被り直し、頬を引き結んだ。
たいしたもんやな、巳代治は和市の帽子から目をそらし、弾んだ調子で頷いた。

ホースを持ち上げるからな。いいか、そうっと、そうっとやらねばならん。畦に這いのぼった巳代治に、川底にしゃがみ込んだままの和市が鋭く叫んだ。そして、ホースの具合をもう一度確かめ、よしというふうにかぶりを振ると、そろりとホースの端を持ち上げた。ところが、ほんの二十センチばかり持ち上げたと思ったら、それまでほとばしり出ていた水の束が、バタリと落ちた。
チキショー！　舌打ちをして、和市はホースを元の位置まで戻すと、素早くその端をくわえた。端をくわえ、川原にかがみ込み、またホースを吸う。何度も吸ったり、唾を吐いたりしながら二度目の水をホースに通わせた。そうやって、しばらく水の束を指先に弾かせ、十分に勢いを確かめたところで、今度こそよしという具合に巳代治を見上げた。
乱暴に扱うんじゃないぞ。巳代治は逆さまに身を乗り出し、和市の肩を三度つついた。しかし、ホースは、やっぱり二十センチぐらい持ち上がったところで、流れを止めてしまった。

父は高鼾で眠っている。帰って来たとき、殆どろれつも回らないほどに酔っており、戸口に額をいやというほどぶつけてひっくり返った。それでも、ちゃんと百杯汲んだかあ、と怒鳴った。上がり框にのびた父を、母と二人で板張りまで押し上げ、土間にひっくり返ったときにこびりついた土埃をはたいた。しかし、シャツを脱がせようにも汗にまみれて脱げず、仕方がないので、出掛けたときの格好のままで板張りの

真中に放っている。
　母は、納戸で寝ている祖母のためにお粥を炊き始めた。小鍋に米と野菜を少し刻んで入れ、けだるそうな顔で火を焚き付けている。種火が小火となったところで納戸に入り、婆ちゃんごめんよ。今日はきつかったろなあ、と言いながら、新聞紙にくるんだものを下げて出てきた。母の薄いシュミーズから、垂れた乳首が透いて見える。
　巳代治は、母が持ち帰った揚げ豆腐を無理矢理口に押し込んでみたが食欲はなかった。それでも二口ばかり食べて二階に上がろうとすると、湯浴びんと、と母が声を上げた。
　川でふやけるほど水浴びたから、いらん。巳代治は返事するなり、階段を駆け上がった。駆け上がって、敷きっ放しの布団を足で丸めると、畳の上に仰向けになった。背中がひりついた。昼間の熱が、体の隅々にまでもぐり込んでいて、まだ全身を灼くようだった。昼も夜も開け放しの窓から、虻やカナブンや藪蚊が入り込み、巳代治のまわりを回る。カナブンは追っても追ってもつきまとい、藪蚊には何十か所も刺された。階下で、母が使う盥の音を聞きながら、巳代治は和市のことを考えた。
「ええのうお前、水汲みなんぞせんでいいし、草毟りもない。新品のグローブもバットもあるし……」
　ホースをあきらめて、二人で川原に寝そべっていたときである。巳代治が何気なくつぶやくと、和市はバッと体を起こし、ええことなんぞ、何にもねえ！　と吐き捨てた。
　あまりの剣幕だったので巳代治も思わず起き上がると、唇を震わせていた和市が、バッカヤロー、あいつなんぞくたばっちまえばええ、と言う。言うなり、和市は抱えてきたホースを蛇がのたくるみたいにたぐり寄せ、川岸に飛び移り、畔道を走り去った。
　あいつとは誰だろう、と巳代治は考える。くたばってしまえばいいほどのあいつとは、ひょっとしたら運動会で帽子を奪い去った自分たちのことではないだろうか。
　しかし、和市は、グローブやズックや自転車など、精米所の信久や薬店の辰彦でさえかなわない上等のものを持っている。家も役場のすぐ下の広い庭のある借家で、離れの自分の部屋には冒険王や少年画報をずらっと並べている。
　百杯目のバケツを上げたとき、日はまだ中天を少し回ったばかりのあたりで、銀の皿に磨きをかけているのだった。
　これから学校のグラウンドに駆けつけても、当分五時のサイレンは鳴り出しそうにない。父は百杯汲んだら行ってもいいぞ、と言った。めったにないことを言う。巳代治はできるだけ早く汲み上げて、信久たちのいるグラウンドに、すぐに駆けつけるつもりでいた。
　しかし、和市が唇を震わせながら叫んだバッカヤローという声が、巳代治の耳に残っている。ええことなんぞ何にもねえ、くたばっちまえばええ、とも言った。
　和市が自分たちのことを指して言っているのなら、信久た

ちのところへ行くことはためらわれる。久しぶりにソフトボールに加わり、得意のセンター返しを試してみようと待ちかねていた。自転車は持たないけれど、信久のお古を借りてグラウンドを思い切り走るつもりだった。

信久や辰彦たちは、家が精米所や薬店であるので、田や畑の仕事はないし、漫画やグライダーなど、新しいものが出ると買ってもらい、巳代治たちに自慢する。

和市も信久や辰彦たちと変わらない。しかし、そんな信久たちと、和市とはやっぱり違う・・・。

巳代治は、ホースをひったくり、ずり落ちそうになる帽子の傾きを直しもせず、和市が走り去った畔道の丈の高い雑草のあたりを、ぼんやりと眺めやった。

見渡す限りの田圃は、穫入れ前の稲田を思わせる。遠くから眺めると、美しい稲穂のうねりがあたりを埋め尽くしているかのように見える。しかし、肝心の実りがない。穂を結ばないままの稲は、すっと空に向かって立ち、さらさらと己れを風に翻している。

もう一週間も降らねば、全滅じゃ。このまま生き延びたとて、いまさら穂が結ぶあてもねえ。おまけにこの風向きだし、と稲荷山の松男が首を締め上げる真似をする。山あいを越え、この村に乾いた東風が吹く間は、雨を呼ぶことはないと言い伝えられている。

俺たちもよ、ここらで見切りをつけて普請工事にでも出るか。川下の普策も、心細気に喉をひくつかせる。

「それにしても、一滴も降らねえ。やっと南方のドンパチから戻って、食うにはこと欠かねえと思ったに、いまさら兵糧攻めでもあるまいによ。重蔵なんぞ、田圃売っ払って町に出たちゅうに、今じゃお大尽よ。若い嬶は連れ戻るし、スクーターで一日走りゃ、何百円と懐に入ってきやがる」

「うるせえ！　やいのやいの言うても始まらん。ぐだぐだ言うてる暇があったら、一杯でも水を汲み上げろ。この川にわずかでも水のある限り、俺たちはまあだくたばりゃせん」

父は、しんせいを地下足袋で踏みにじると、松男たちに怒鳴った。そして、どけどけというふうに畦に尻を落とし、バケツをガラリと川底に投げる。巳代治もバケツを投げる。しかし、巳代治のバケツは、父のような威勢のいい音はたてない。

こんなことを、いったいいつまですればいいのだろう、と考える。一杯ずつの水を、それも、地に傾けた途端に行方も知れず霧散してしまうほどの覚束ないことを・・・。

なにぼやぼやしとる。ほら、また手元が動いとらんじゃねえか。ヤニ臭い父の息が鼻面を撫でた。父の顔が振り向いている。髭に埋もれた口の端にあぶくを溜め、なにか言いたそうに目玉をせわしなくめぐらせている。だが、それ以上は言わなかった。なにも言わずに向き直ると、ムッと気合を込め、次々にバケツを引っ張り上げる。ときどきはバケツを頭上にかざし、力まかせに遠くの方にうっちゃる。

ムッ、ムッと父の気合がほえる。ビシッと縄が張る。父の傾けるバケツの水の音は、短かい。巳代治は、伸びたり縮んだりする父の肩の肉を見ている。太くて、硬くて、バネ仕掛けの機械に似たその肉は、巳代治にはどこか毀れかけた人形のように思えてならない。

松男は、潰れかけた目をやっとのことで開いて、こうなったら、討ち死にするよりほかねえ。そうじゃねえか、な、なあ、と普策の背中をピシャリと叩く。晋策は、胡坐の足を何度も組み替えながら、コップの焼酎を顔の方から近付け、すすり込んでいる。日が落ちるとともに、誰がいい始めるともなく、酒になった。雨乞いの儀式なのだそうだ。

「これぐらいでへこたれてちゃ、七代続いた筋金入りの百姓が泣くぞ」

「そうよ、たかが二か月じゃねえか。どんと大雨でも来てみろ。そんときゃあ、鍛えに鍛えたこの腕で、黄金の穂を蘇らせてみせらあ」

「木の根っ子でも、大根の葉っぱでもかじって、そのうちになあ、普請人夫なんぞに逃亡したやつらをきっと見返してやるのだ」

酒が入ると、昼間の様相とは全然違う。松男も晋策も、泥のこびり付いた手や足をボリボリ掻きながら、歌うように言う。松男は、父がもう入らんがなと止めるのを振り切って、もう一本買うてこいや。なんせ、今夜はお天道さんに届くほど飲まんならん。残ったら、ジュースでもアイスキャンデーでも好きなもんを買え、と巳代治に皺くちゃの札を渡した。

巳代治は、台所で生あくびを何度も噛み殺している母の傍をすり抜けて、外に出た。もう十一時をだいぶ回っている。空を見上げた。雨の気配などまるでなかった。空には、今夜も大粒の星々が、自分の姿を誇示しようとひしめき合い、ざわめき合っている。

巳代治は、出て来たばかりの戸口の方を振り返った。裸電球の下では、松男と晋策が肩を組み、小皿を箸で叩いている。

畜生！　鉄砲水でも、土砂崩れでも来てみろや。松男のわめき声が、巳代治の肩を押した。後ろで、甲高い笑い声が上がった。

巳代治は星明かりの下を、門口へ飛び出した。近くで誰かが呼ぶ。木陰に目を凝らすと、和市が自転車を止め、荷台に腰掛けていた。

和市はひょいと荷台から飛び下り、自転車を押しながらついて来た。自転車を押しながら、しきりに小石を蹴る。

どうかしたんかと聞いても、黙って自転車を押してついて来る。巳代治が、店を閉めようとする寸前の酒屋に飛び込み、焼酎とアイスキャンデーを二本買う間、和市は店の前に自転車を止め、手でペタルを力まかせに回していた。アイスキャンデーを一本渡すと、和市はすぐに頬ばり、そして、巳代治が地面に引き摺っている手提げの一升瓶を、ハンドルにぶら

下げてもいいぞと言った。巳代治が一升瓶をハンドルに下げると、わずかな勾配の坂道を、今度は和市が先になって歩き出した。

巳代治もアイスキャンデーを舐めながら、自転車の後ろを歩く。先に食い終わった和市が箸をポイと投げ捨て、先に行くぞ、と言ってサドルにまたがった。そのまま坂道をこぎ上がり、和市の姿は瞬く間に闇の中に消えてしまった。

巳代治が小走りで駆けて行くと、遅いぞ、と門口で待っていた。

明日、出られねえか。一升瓶を渡すとき、和市が少し声を落とした。明日？　と聞く巳代治に、明日の夜九時、稲荷山の鳥居のところで待っとれ、と言い残し、風を切るスピードで和市は去って行った。

翌朝巳代治が目覚めたとき、外はまだ薄暗く、生温い風が吹き渡っていた。縁側に出ると、庭に立った父が手の平を表にしたり裏にしたりして、空を見上げていた。明けたばかりの空はどろりと垂れ下がっていて、背戸の木々がざわつき、鳥たちが鳴き交わしながら低く飛んでいた。音のない稲光りが、幾度となく空の端をかすめた。

一雨来るかもしれん。父は、ぽつりと言った。ひょっとしたら昨夜の雨乞いが効いたのだろうか、と巳代治は思った。和市と別れた後二階に上がって、いつまでも止まない松男たちの騒ぎを聞いていたが、いつの間にか畳に転がったまま寝入ってしまったのだった。しばらくの間、和市が言い残した言葉のことを考えていたが、瞼を縫いこめてくる眠気には勝てなかった。

バラバラと庭の葉蘭が鳴った。ぶ厚い黒雲がにわかに速度を速め、背戸の後ろから被さって来た。稲妻が音を伴い、近付いてきた。

こりゃあ、本気で来るぞお。父は、半分ばかり酔いの残った血走った目で、雲を追っている。その言葉が終りもしないうちに、すさまじい音と光が真上で炸裂したかと思うと、じょうろをぶちまけたとも思える大粒の雨滴が落ちて来た。瞬く間に、父の髪が、シャツが濡れ通っていく。父は稲光りのただ中に立ち、空を仰ぎ、濡れそぼる髪をふり乱しながら、チッキショー！　と叫んだ。ズボンが、ベルトが、草履が雨を吸い、吸い尽くして水滴を弾き返していく。

巳代治！　父が巳代治を呼んだ。見ろよ、父は腕を振り回しながら、絆創膏を巻いた指を巳代治の方に突き出した。そして、その絆創膏を歯をたてて毟り取った。見ろよ、見ろ。父の目が打ち掛ける雨の雫に、まるで流れこぼれるのではないかと思えた。

しかし、雨はすぐに止んだ。黒雲が足早に駆け去った後には、もう薄い青味が覗いていた。そのかすみを引いたほどの雲が去ると、以前よりも青く高い空の淵が底を見せ、生温い風も止んだ。父は、庭に立ち尽くしたままだった。あっけない出来事だった。濡れ通った髪やシャツは、まぎれもなく今

の出来事の跡をとどめているのだったが、父の立つ庭は、もう音をたて、煙を上げ、乾き始めていた。

石ころの多い道は、巳代治の足を何度もすくった。あたりは星明かりで、草の根元まで見分けられるほどであるのだが、木陰に入ると、さすがに横っ面をはたかれてもわからないほど暗い。巳代治は石段を駆け上がった。二十段ほど登ると、朱塗りの小さな鳥居がある。

来たのか。巳代治が最後の階段を駆け上がると、和市の声が飛んだ。巳代治は、帽子の下で、和市の目が異様に光っているのに気付いた。

和市は黙ったまま、鳥居下から横道に入り、大股でずんずん歩き出した。行き先には、村人たちが花見などでよく使う芝生の丘がある。和市の帽子が、いかにも通い慣れた様子で、巳代治のはるか前方の暗がりを縫って行く。

ひと際大きい桜の下で、和市の足がぴたりと止まった。巳代治の足も一緒に止まる。

和市の鼓動が、巳代治の耳にも聞こえてくる。巳代治の胸も、あやしく波打ち始めた。和市は桜の幹に身を寄せ、帽子のひさしだけをのぞかせて、数メートル先の茂みのあたりに目を凝らしている。暗さに慣れてくると、茂みの向こう側にかすかに動くものが見えた。

白っぽいスカートの女と、痩せぎすの男……。暗がりの中で、痩せぎすの男の目が、突然巳代治たちの方に向けられた。男が気付いたのだ、と巳代治は思った。巳代治は思わず後ずさりそうになり、身構えたところを和市の腕に押さえられた。

だが、巳代治の思い過ごしだったのか、男は女の方に向き直り、肩に手をまわすと、一方の手で女の腰のあたりをさすり始めた。巳代治は、男の顔に見覚えがあった。山川という、去年長崎の高校を出て村役場に入ったばかりの男である。巳代治の膝頭が震え、そのうち身内からとめどもない粟粒の輪が湧き出し始めた。

あいつって、確か……。巳代治はかろうじて言った。縦にとも横にとも知れず、和市は小さく首を振っただけで、目の焦点を茂みの向こうに定めている。目深に被った帽子の下で、その目が濡れたように光り続けている。

巳代治が男を最初に見たのは、半年ばかり前の雪の日の夕方だった。和市が学校を休んだので、配られたプリントをもって和市の家に寄った。ちょうど帰り道の途中になるのだったから、和市への連絡は巳代治の役目になっていた。

和市は、いつも離れの部屋にいて、ノックをすればガラス戸がスッと開き、白い帽子が顔を出すのだった。巳代治は和市の部屋の前に立ち、ガラス戸を叩いた。しかし、答えがなかった。もう一度叩こうとしたとき、玄関に人のもつれ合う気配がしたので、さし出しかけた手を引っ込め、傍らの植え込みの陰に身を寄せた。

そのまま立っていると、玄関が静かに開き、しばらくして

女が出て来た。透き通るほどに肌の白い、少女のような女だった。巳代治があわてて植え込みの陰に身を沈めると、女は周囲を見わたし、そして、玄関の内に低く声を掛け、すぐに内に姿を消した。

入れ替わりに、男が出て来た。重蔵ではなく、痩せぎすの若い男だった。男はぐるりと周囲を見わたすと、駆け足に近い速さで役場への石段を登って行った。

男が去ったあと、巳代治が元の位置まで戻ってみると、玄関は閉ざされ、暗くなり始めたというのに、玄関にも、奥の台所のあたりにも灯りはともされていなかった。巳代治は、ズボンの裾から這い上がってくる寒さに震えながら、和市の部屋の前に、日が落ちるまで蹲っていたのを覚えている。

巳代治と和市は、フェンスの外の柵に腰を下ろし、見るともなくゲームを眺めている。　夏休み最後の出校日は、ホームルームの一時限だけで終った。教室からの出掛けに巳代治は和市に呼びとめられ、肩を並べてフェンスの外まで歩いて来た。信久や辰彦たちは、グライダーをやると言ったり、サッカーがいいと言ったりしていたが、結局ソフトボールになった。一番上等のグローブを持っている和市にも声が掛かったが、和市はグローブなら貸してやる、といって信久に投げてやった。

許せん。和市が信久たちの方を睨んだまま言ったので、初め巳代治は、信久か辰彦のことを指しているのかと思った。和市の目がきらめいているのを見て、巳代治は、ようやくあの夜のことだと思い当たった。巳代治の胸に、茂みの向こうの暗がりで、男と女が秘密めいた仕種で寄り添っていた情景が、ありありと甦ってきた。

あの男なら俺は知っとる。巳代治が言いかけると、和市はすっと立ち上がって、和市の家に下る道とは反対側の、川の方に下り始めた。カヤ草や落葉を踏み分け、一直線に川をめがけて下って行く。

こんな格好で川に行ったらまずいんや。巳代治が、和市の背中を追いながら言う。今巳代治が、風呂敷を抱えたままの格好で田圃の傍まで行ったりすれば、父からこっぴどく怒鳴られることは間違いない。おまけに、雨乞いの日の翌日のわずかな雨以来、父の機嫌の悪さには手が付けられないほどだ。

ぬか喜びさせてからにいと、母に当たり、巳代治に当たり、このくそ忙しいときに葬式なんぞ出すから、縁起でもねえと、母の妹の嫁ぎ先の死んだ婆さんにまで当たり散らす始末である。

おい、まずいことになる言うとるやろ。巳代治が咎める口調で言うと、和市はいきなり振り返り、この頭をようく見ろと、帽子をバッと脱ぎ去った。

巳代治は、言葉を失った。目の前の和市の頭には、一本の毛もない。毛穴さえない。皮膚は黄土色に鈍く光り、爛れの部分を切開したとみえるひきつれが、数本の筋をなしている。去年の運動会のときに一度見たとはいえ、あのときはこれほ

どの間近ではなかった。
よおく見るんだ。和市の声には凄味がある。唇はひき結び、首筋や耳朶からは血の気が引いている。巳代治は、和市の手からすばやく帽子を奪い取ると、その頭に急いでのせた。和市は抗わなかった。帽子が戻ると、和市の顔や耳朶にいくらか血の気がさしてきた。しかし、しきりに唇を舌先で舐め、目は宙に漂わせている。

和市はいったん川の土手近くまで下りると、道を鈎形に折れて、もう一度斜面を登り始めた。巳代治は、黙ってついて行く。だが、いくらも登らないうちに、和市は梅檀の木陰にしゃがみ込んだ。
おふくろなんかいない。傾きかけた帽子を目深に被り直すと、和市は乾いた声で言った。巳代治の胸に、あの雪の日の玄関に立った、抜けるように色の白い女の顔が浮かんだ。
信久や辰彦たちが言っていた、重蔵の嬶は後添えだちゅうという言葉を思い出し、しかしその後添えの子が生まれもつかぬ火傷を負うたと言っていた筈だ、などと考えていると、和市は、弟のハジメだと草叢を指差した。草叢には、三十センチほどの高さの石組みがあり、蔦に絡まれ崩れかけていた。
「いつもここに来る。ここにいると、とても気分がいい。なんでも話せるし…。一緒に暮らしたのは八年とちょっとかな。長崎から一緒に来た。それから一年とちょっとだ。ハジメは、もともと足の一本が千切れていた。その足を引き摺りながら、川辺を歩いているのを拾って来た。丸い目をしたチビ犬でよ。しかし、しまいにはその目も見えなかった」
和市は、石組みの中の石の一つを撫でている。ハジメの死骸は和市が埋め、石組みもこしらえたという。巳代治の胸に、帽子を目深に被った和市が、ハジメと兄弟のように馴れ合っている様が浮かんできた。
「あいつはハジメが大嫌いでよ、そんなもの捨ててこいと言うばかり。何度も棒っ切れで殴るんだ。必死の形相でよ。だって、ハジメがいると都合が悪いのさ。ハジメは、あいつが夜更けに戻って来るとけたたましく吠えたてるのだからな」
和市は、あの女は肋膜なんかではなく、ひどいヒステリーもちだと唇を震わせた。
和市は、俺のことで、あいつがヒステリーを起こすのはわからなくはないけどと言い、だけど、俺が囲炉裏に転がり込んだとき、あいつは家にいなかった…。一歳になったばかりだった、と帽子の下の目を光らせる。
和市は足元の草を力まかせに引き抜き、眼下の川めがけて投げ付けた。和市の手を離れた草は、いったんくるくると回りながら空に舞い上がったが、近くの笹群にストンと落ちた。乾いた土埃と草の切れ端が、巳代治と和市の帽子に降って来た。
ええなあ、お前は。和市は川を見下ろして立ったまま、ぽつりと言った。巳代治は、俺なんぞ、何もええことはないと言おうとしたが、喉の奥がからまり、うまく言葉が出て来な

かった。

和市が、でんでんむし、食ったことあるかと聞くので巳代治がないと言うと、でんでんむしはうまいぞと笑った。和市はあたりの木端を拾い集め、ポケットからマッチを出して火を点けた。燻りだした煙に巳代治が咳き込んでいると、どこから探して来たのか、和市はでんでんむしを一つ握っている。それを、木端の火に埋め込んだ。

やがて、白い身が泡を吹き始め、香ばしい匂いがたち込めてきた。和市は灰を払って殻を取り上げると、食うかと巳代治に差し出した。巳代治が思わず体を捩ると、和市は笑い、薄い殻をはがして身を一口齧った。うまいぞ、でんでんむしは上等や。でんでんむしがいないときは、蜻蛉も食う。蜻蛉がいないときは、蛇やトカゲも焼いて食う、と言った。

それは、黒光りのするグローブやバットを持ち、自分の自転車まで持っている和市には似合わないことであり、しかし、帽子を目深に被り、いつも一人ポツンと教室の隅に座っている和市には、いかにもふさわしいことのようにも思えた。

父が、引き上げかけたバケツの縄をゆるめ、空を仰いだ。まだ昼食までには間がある。汗が丸首シャツから滴り、薄茶色の半ズボンを黒く染めている。

いかんか、のう。父が低くつぶやいた。そうやって、じっと空の一所に目を止めている。

空には雲一つない。パチパチに乾いた空気の粒が、見わたす限りの空間という空間を一分の隙もなく埋めている。巳代治は、空気というものは微細なガラス細工であり、それが幾層にもはるか高くにまで積み上げられ、成っているのではないかと思う。

父は、しんせいの煙を小さく燻らしている。殆どが黄変してしまった稲田の中で、父や松男や普策たちの田圃はまだいくらか青味を残しているのだったが、たとえこのまま持ちこたえたとしても、実を結ぶほどの勢いが残っているのか、見当がつかないのだった。

晋策などは、もうお終いじゃ、こんなこと続けてたらもの笑いの種になっちまうし、それこそ日干しよと言うのだったが、父と松男に、今さらなにぬかす。だったら、普請場へでもどこへでも行っちまえ。そのかわり、もう金輪際、仲間うちの付き合いはしねえからなと突っ撥ねられ、しぶしぶとどまっている。

やっぱし、晋策の言うとおりかもしれん。父の姿を見ていたのか、筋向かいの田圃から、松男が情なさそうな声を掛けてよこした。松男は、麦藁帽の輪から手拭いを下げ、漫画の本に出てくる雑兵みたいな格好をしている。

「なにぬかすか、このど阿呆。今俺たちが見捨ててしまったらどうする。それこそみんなの笑いもんよ。いんや、笑いもんでもなんでもええ。俺は逃げんぞ、絶対逃げん」

不意を突かれた父は、雑兵を下知する侍大将のように声を

張り上げた。髭を剃らない頬がげっそりこけ、見開いた目玉が対岸の相手を睨み付けている。
　そんなにむきになるな。今はもう、好きなようにしても罰は当たるまいぜ。これだけやったんだからなあ、と松男は川の岸に腰を下ろし、バケツを流れに放り込んだまま、降るときゃ降るし、降らんときゃ降らん。何もかもお天道さま次第よ。俺たちがいくらあくせくしても、しょうがあるめえと、すっかり観念したふうである。
　二人の話を聞き付けて、下流から晋策も上がって来た。
「そんなとこさな。さあ、殺せ、だ。おい巳代治、アイスキャンデーでも買うて来いや」
　松男が、腰の鎌を力まかせに畦に突き立てると、財布から札を抜いて巳代治に握らせた。
　そいつはわかる。けどな、川にはほうれ、まだこんなに流れが残っとる。こいつがあるうちは、へこたれてはならんのと違うか、と父が気色ばんだ。
　そらそうやけんど、昔爺さまに聞いたことがある。川の底までかすめ取ってしまうと、泥鰌も田螺も死んでしまう。それだけやない。干上がってしもうた川には、もう二度と生き物が戻って来んとな。鮒も蛙も、亀だって甲羅をひっくり返して、うようよ死んどる。蛇だって死んどるぞ。これまでや。もうここらでええんじゃ。おい巳代治、早う行って来い、と松男が急き立てた。
　巳代治が畔道を走り出そうとしたときだった。カーブを曲がって、スクーターがやって来た。重蔵だった。重蔵は太った体をそらせ、気持よさそうに髪を風になびかせている。
　それが、スッと止まった。止まったかと思うと、二言ばかり笑い声を上げて、すぐに走り去った。巳代治の母が三叉路から出て来たのだった。寝たり起きたりの母が、昼食を知らせに畔道へ下って来るのだろう。
「重蔵が一番だぞな。降ろうと照ろうと関係ねえ。日銭はガッポリ入る。嘘は新しい二人目を見つける。それに比べ、一体俺たちゃあ、何だってんだ」
　晋策が感に堪えない声で言ったので、松男も重蔵さまさまだよなあと笑った。
　しかし、巳代治は、去って行く重蔵のスクーターの向こうに、ふと和市の姿を見たのだった。ひょっとしたら、和市は今も一人で蜻蛉をむしっているのかもしれない・・・。

　ハジメの石組みの前で、あれから和市と巳代治は、しばらく木端が燻るのを眺めていた。焼けたでんでんむしは、一口齧っただけで、木端の中に放った。本当はちゃんと、食わんといかん。跡形も残さんようにな。これは仁義や、そいつの命を奪ったということのな。命はな、もともとは空から落ちて来たんや。だから、きちんと空に返してやらんといけんのや。和市は、なおも言おうとしたが、急に口を噤んだ。白い帽子を傾け、そのままじっと木端のはぜる音に聞き入っていた。乾ききった木端は、少々青かったが、しばらく燻ったか

と思うと、すぐに炎を呼び、勢いよく燃え上がった。

地から唸り響くサイレンの音で、巳代治は目を覚ました。階下の布団には、父と母の姿はなかった。枕元の障子戸が開き、外で何人かの大きな声がしていた。

巳代治は寝巻のまま草履をつっかけ、戸口を出た。何時であるのかわからなかったが、夜明け前には違いなかった。星が一際明るく、太く青く瞬いていた。

別棟になっている物置の角を曲がったときである。それまで、背戸の木々に遮られて見えなかった川の方角が目に入った途端、巳代治はあたりの全てが火に包まれているのではないかと思った。巳代治は、その場に立ち竦んでしまった。胸が震え、唇が震え、足がわなないた。そんな巳代治の姿を見付けたのか、火の色に焙られていた人影の中から母が駆け寄り、巳代治の手を引いてくれた。

火の手は二本上がっていた。太い火柱は高い石垣の上の村役場から、もう一本はすぐ下の林の間から上がっていた。

巳代治は、下の火は重蔵の家だと聞いたとき、胸のうちを冷たく過ぎるものがあった。和市の白い帽子の色が、いきなり目の裏を駆け抜けて行った。

大丈夫かよお、田圃に火の粉が飛びやしねえか。松男が大袈裟な身振りで喚いている。サイレンの音と一緒に早鐘も鳴っている。村道を消防の法被を着た男たちが、火柱の方に走って行く。見ている間に炎の赤い舌が、二階建の役場の屋根を突き抜けて空に昇った。火は日の出前の空に掴みかかり、躍り上がり、仁王立ちになったかと思うと、のたうち揺れる。

消防のポンプ車は着いた筈なのに、炎を横切る水の束はない。

無茶苦茶や。今どき、どこに水がある。松男と晋策が砂利道にしゃがみ込み、口を開け放したままでいる。炎の火照りが彼らの頬や腕を赤く染めているのに、口はぽっかり開いた穴である。

馬鹿なこと言うとる場合か、男はみんな火事場に急ぐんじゃ。端っこにいた爺さんがそう怒鳴ったので、父や松男たちは寝間着や下駄のままで、あわてて駆け出した。巳代治は母に手を取られ、立ち尽くしている。たとえ足元まで火が迫り、母が巳代治をせきたてたとしても、一歩だって動けそうにない。

父や松男たちが駆け出して間もなく、役場の炎は、それまで幾分黒く見えていた瓦の部分や、陰になっていた離れの建物までの全てを、激しい火色で包んでしまった。早くから火の手が上がっていた入口に近い方の天井部分などは、梁が飴色になり、焼け落ちてゴウと火の粉を吹き上げる。役場の下の林の方からは、はじめ盛んに火の粉を吹き出していたが、一陣の風とともに林全体が炎に包まれてしまった。

巳代治は、五、六百メートル以上は離れている筈であるのに、それらの弾ける音を間近に聞き、それらの焼け落ちる色

を見、躍り上がる炎の熱さを痛いほど肌に感じた。

火事は、夜が明けてしまう頃にようやくおさまった。

役場から出た火は、瞬く間に風下の重蔵の家に飛んだのであるが、役場が石垣の上の高台にあったためか、その他への類焼はかろうじてまぬがれた。重蔵の家に飛んだ火は、林を包み、斜めに走って、学校や、稲荷山や、稲田にまでも移る勢いを見せていたが、男たちが林を遠巻きに伐採し、瀬戸際で火勢を食い止めたため、最悪のことにはならなかった。

それでも、焼け跡の熱が冷めるのに、なおも一昼夜かかった。空気が乾き、水もないという悪条件の中で、唯一幸いしたのは、途中人家や田畑のまばらな半島の根元の方に向けて、昼間とは反対の西寄りの風が一晩中吹き付けていたということだった。

風向きが反対だったらと思うと、ゾッとするよな。まだ興奮の冷めやらぬ人々は、村の辻々に立ち、そう言い合い、胸を撫で下ろした。

原因は、役場の宿直の寝煙草ではないかと言い、あるいは付け火ではないかと言う噂が村中に広がったが、その証拠は見付からなかった。焼け跡は、人の思惑や推測を完全に拒むほどに、あたりの全てが灰と化していた。

火勢の割には、人の被害は意外に少なかった。宿直だった役場の山川は、煙に巻かれる前に窓からいち早く飛び出していたというし、類焼した方の重蔵は泊り掛けで半島の温泉町に出掛けていた。重蔵の妻は、裏口から逃げるときに裸足の足指にガラスの破片を刺したが、消毒液を塗るだけで済むという程度の怪我だった。

だが、和市の姿がなかった。火の粉の中から白い帽子の子供が飛び出し、裏山へ逃げたという者もいれば、燃え盛る炎をかいくぐって建物の中に飛び込んだと言う者もいて、はっきりしないのだった。

「もしそうだとすりゃ、あんな子供なんぞ、灰のかけらも残るまい」

「いやいや、あのすばしっこさだから、きっとどこかに逃げおおせた筈じゃ」

男たちは口々に言い合いながら、積もった灰の中を、あたりの山の中を、手分けして探したのだが和市はどこからも現われなかった。

巳代治は、火事場とは反対側の学校の下への道を下った。川の土手近くまで下り、道を鈎形に折れて、もう一度斜面を登る。カヤ草をかき分け、草叢の中の石組みの前に立った。石組みを前にしゃがみ、そして、和市がしていたように石を撫でる。

そうやって撫でていると、和市の温もりが石を通じて伝わってくるようである。

あの晩、和市はこうして石組みの前にずっとしゃがみ込み、チビ犬のハジメと心いくまで馴れ合っていたのではなかった

だろうか。あるいは、今もまだ、でんでんむしを探して、近くの木陰や草叢をさまよっているのかもしれない。そのうち、あの影絵がひょいと人影になる現われ方で、白い帽子の姿を突然現すのかもしれない。そう、巳代治は思ってみた。

「これが、仁義や・・・」

ふいに和市の声がした。巳代治は、声の方を振り返った。消え入りそうではあるが、確かに和市の声だった。和市の声は、手を伸ばせば掴めそうな、すぐ後ろの一角から聞こえたのだった。

巳代治は空を見上げた。見渡す限りの青さだった。空には、一面に研ぎ澄まされたようなガラスの粒が、どこまでも高く、ちりばめられていた。

（了）